

山路愛山における歴史と文学

History and Literature in the text of Yamaji Aizan

吉岡 亮

YOSHIOKA Ryo

In this paper, I clarify how the relationship between history and literature was discussed in texts of Yamaji Aizan. Also, I consider how Aizan's texts were related to the context of the same period. I thereby examine the influence of the discourse of Minyusha.

はじめに

現在、私は明治期の民友社の言説が当時の文学や歴史の議論の中でどのような位置を占めていたのかを研究上の主題としており、その成果の一端を昨年「徳富蘇峰『人物管見』論——人物評論と同時代の文学論」として発表した。そこでは、徳富蘇峰の人物論が、文学・歴史の双方において新しい試みとして受容され、文学と歴史の境界線をめぐる新たな言説を生み出していたことを論じた。本論は、蘇峰と共に、民友社を代表する人物の一人として知られる山路愛山のテキストを見ながら、上記のような主題を先の拙論とは別の角度から検討するものである。すなわち、本論は、愛山のテキストでは、歴史と文学の関係性はどのような形で論じられていたのか、また、それを論じる際にどのような枠組みや概念が用いられていたのか、そして、そうした枠組みや概念は同時代のどのような言説と関連していたのかという点を見ていくことで、民友社の言説の特徴を明らかにする試みである。

第一節 歴史と文学

本節では、山路愛山が歴史と文学の関係性を論じる際にどのような枠組みを踏まえていたのかを確認していく。

愛山は、明治二五年九月発行の『護教』に「文学と歴史」と題する論説を掲載している。まずは、その内容を確認していきたい。

「文学と歴史」において、愛山は「今や歴史は全く改造せらるべき運命」にあると述べる。愛山によれば、現在の歴史は「乾燥無味なる記事の排列」に過ぎないという。これを「血あり肉あり興味ある真の歴史」に改造するためには、歴史の「材料」として「文学」を取り入れることが重要である。なぜなら、文学はそれが書かれた時代と密接に関係しているものであり、「文学は時代と人とを著し時代と人とは文学を説明し歴史ハ一個の快味を生ずる」ようになるからである。さらに、「世の戦闘、争奪、革命、争乱、其形状ハ千差万別」であったとしても、その「下に在りて陰騰黙移」する「人心の潮流」を知るには文学しかないからである。愛山はこのような形で文学によってしか知り得ない領域が存在していることを主張し、歴史の材料としての文学の役割の大きさを強調していたのである。

その上で、愛山は具体的な事例をあげながら、歴史の材料として文学を活用し得る可能性を指摘していく。例えば、為永春水の著作は当時の江戸の暗部を描いたものとして読めるのであり、「世の歴史ハ只社会の表面のみ記して、此裏面の大腐敗を記さざるなり、独り為永の著、之を暴白して余りあり」と評価できる。さらに、北村透谷が発表した「徳川氏時代の平民的理想」⁽¹⁾は、「近松と西鶴とを以て大坂文学の代表者となし、之に因りて徳川時代平民的理想を論」じたもので、文学によって「人民的理想」を知ろうとしたものと考えることができる。愛山はそのような形で具体例をあげながら、自身の歴史と文学に関する議論を補強していた。そして、「文学と歴史」と同時期に発表した「平民的短歌の発達」や「山東京山」などで、愛山は自らが主張していた文学を材料として歴史を記述する方

法を実際に試していたのである。

こうした愛山の歴史と文学に関する認識の背景には、二つの文脈があったと考えることができる。

第一は文明史・文明論の文脈であり、それは、愛山の議論においては、従来の歴史に対する批判と人心への着目に表れている。明治期における文明史・文明論については以前、拙論でも取りあげたことがあるので⁽²⁾、ここでは、愛山の認識とつながる代表的な事例のみをあげておきたい。

文明史・文明論における従来の歴史に対する批判としては、福澤諭吉の『文明論之概略』⁽³⁾の次の言葉が有名である。

都テコレマデ日本ニ行ハルヽ歴史ハ唯王室ノ系図ヲ詮索スルモノ歟或ハ君相有司ノ得失ヲ論ズルモノ歟或ハ戦争勝敗ノ話ヲ記シテ講釈師ノ軍談ニ類スルモノ歟大抵是等ノ箇条ヨリ外ナラズ（中略）概シテ云へバ日本国ノ歴史ハナクシテ日本政府ノ歴史アルノミ

このように述べた上で、福澤は、今後は、日本政府という社会の一部の動向を対象とするのではなく、「一国人民の智徳」に着目する文明史的視点に基づいて、社会全体の動向を対象とする歴史が書かれなければならないと主張していた。そして、そうした文明史的視点は、「人心の働」や「人心の潮流」といった概念でその後の文明史・文明論に引き継がれ、その具体的なあり方を示している宗教や文学、道徳、芸能といった諸領域が歴史記述の対象とされることになっていったのである⁽⁴⁾。

歴史と文学に関する愛山の認識の背景にあるもう一つの文脈は、歴史との関係で小説の有用性を意味づける言説である。ここではそれが見やすい形で表れている坪内逍遙の「小説神髓拾遺 時代物語の論」（以下では「時代物語の論」と略す）を参照したい。

「時代物語の論」の冒頭で、逍遙は、時代物語については『小説神髓』

ですすでに取りあげたが、そこでは論じきれなかった点もあるので、改めて考察したいと述べている。その上で、時代物語には「娯楽」という直接的な目的と共に、「史学の補助となる事」、「風俗史たるの用をなす事」、そして「歴史上の人物の性質を明にする事」という三つの間接的な目的があると逍遙は指摘している。以下では、愛山の議論と関連する「史学の補助となる事」と「風俗史たる用をなす事」の二点を取りあげることにはしたい。

第一の「史学の補助となる事」において、逍遙は「歴史の改正」の必要性と、小説によって「正史を補裨」する可能性を以下のように述べている。史学とは本来「因縁と結果の関係を明示して興廢の道理を詳叙する」学問である。しかし、これまでの和漢の歴史家はこの点を理解せず、「唯徒にくだしく皮相の事実をのみ蒐集して年代を逐ふて列叙するのみ」であった。そうした歴史記述では、「興廢存亡の事の跡」は描き出せたとしても、「興廢の結果の道理」に説き及ぶことはできない。一方、小説は、「架空無稽の話譚」であるから「談論の境界」はきわめて広く、「国家興廢の因果理を言はず語らずして見えしむるやうに書きあらはす」ことができる。逍遙は、事象の因果関係を明らかにし、それに基づいて国家や社会の興廢に関する一定の法則性を明示することを歴史の役割とした上で、従来の歴史記述はその任を果たしていないが、小説ならばそうした役割の一部を担うことができると主張していたのである。

第二の「風俗史たる用をなす事」でも、逍遙は歴史記述に対する批判と関連させながら小説を位置づけている。

こゝに風俗といふは当時の風俗習慣はさらなり人情をさへに含めていふなり開化史などいふ者の一たび世に出つるやうになりて以来は往古の風俗習慣なども力めて取調る事とはなりしが其以前には歴史といへば一向国王の言行を叙し若くは戦乱を記するのみ其本分と心

得つゝ他の人情と風俗とは敢て録せざる事なりけり然るに時勢の傾向を知らんとするは先づ其時の風俗習慣並に人情の傾向をば探り知ることを必要とす蓋し興廢の因縁原由は重に民情に在て存すればなり（中略）小説にて之を述べば風俗も習慣も総て篇中の説話に依じて今見る如くに写し得べし人情もまた之に同じく其篇中の老幼男女の言行の上にはあらはるゝから之を探るも難義ならず之を写すにもいとたやすし

かつての歴史記述が国王の言行や戦乱しか対象としてこなかったのに対して、最近登場してきた開化史は、時勢の傾向を知るために風俗習慣や人情に着目している。また、国家や社会の興廢の原因を探る上でも、人情への着目は欠かせない。そして、小説であれば、風俗習慣や人情を物語の中で「見る如くに」写し出すことができるのであり、開化史のそれらに関する記述を肩代わりできる。逍遙はそのように主張していたのである。

かつての歴史記述と開化史の対比は、先に見た『文明論之概略』における日本政府の歴史／日本国の歴史という対比と重なっている。ただ、文明史・文明論において後者を記述対象とするために必要とされた人心への着目が、逍遙においては「風俗習慣並に人情の傾向」を探ることの必要性と言ひ換えられていた。そうした用語上の若干の違いはあるが、逍遙の言う「開化史」は文明史・文明論とほぼ同義と捉えてよいだろう。

その点を確認した上で、上記のような逍遙の議論の特徴を位置づけるとするならば、それは、近世期以来、歴史と物語の関係性を論じる際に用いられてきた正史実録／小説稗史という枠組みを歴史／小説という枠組みへと再編成したものと考えることができる。

正史実録／小説稗史という枠組みについても拙論ですでに扱ったことがある⁽⁵⁾ので、ここでは簡単に確認しておきたい。近世期において、この枠組みが使用される際に共有されていた認識は、正史実録は事実を読者

に伝え、人の教えとなるものであるのに対して、小説稗史は歴史に記載されないようなエピソードから生まれる娯楽であるが、虚誕ながら世態人情を写し、勸善懲悪を明確にすることを目的としている点にその存在意義があるというものであった。こうした認識は、明治に入ってから歴史と物語の関係を思考する際の一つのモデルとして広く共有されていたわけだが、逍遙の先の議論は、正史実録の位置に、明治になって新しく現れてきた文明史・文明論を置き、それとの関係で小説の有用性を新たに意味づけようとしているものであった。すなわち、逍遙は、『小説神髓』で提唱していた「人情」と「世態風俗」を写すという小説モデルを時代物語にも当てはめながら、そこで写される人情と世態風俗を、文明史・文明論における人心と重なるものとすることで、時代物語の有用性を意味づけていたのである。それは、正史実録／小説稗史という枠組みから文明史・文明論／時代物語＝歴史／小説という枠組みへの転換を意味するものであり、愛山の歴史／文学という枠組みは、こうした転換を踏まえた上での議論となっていたのである。

第二節 歴史学への批判

再び山路愛山の「文学と歴史」に戻ると、歴史の材料としての文学の有用性を述べる中で、愛山は歴史学における『太平記』批判にも言及していた。そこで愛山は、重野安繹が『太平記』は「作物語の類」であるから歴史の材料とはなり得ないと述べていることに対して以下のように反論している。たしかに『太平記』の記事は「殆んど小説らしき」もので、「正史」を書いたものでないことは明らかである。しかし、『太平記』の記者が「南朝に表せし同情」は当時の「社会の或部分の感情を代表」したものであろうし、その「厭世的」な認識は「当時仏教の如何計り人心に浸染せしか」を示している。その他の記事からも「風俗の変人情の異」を察することができるのであり、『太平記』は「当時を顕ハす」歴史の材料と

して十分活用できるのである。

愛山は同様の議論を「戯曲,小説(史料として)」や「歴史の話」でも展開している。例えば,前者では、『平家物語』『太平記』を「小説的の野史」とし、「仔細に此小説的の野史が書かれたる所以を察し,其中に現はるゝ人情風俗に思ひ到らば,此れ豈絶好の史料に非ずや」と述べた後,次のように記している。

史は事実を画く者也。而も所謂事実なる者は必ずしも一定の時間に起りたる一定の事件を指すに非る也。風俗,人情,信仰,気象といふが如きも亦事実也。風説,作話,流行せる想像の如き亦事実也。史は総て之れを網羅せざるべからず。何ぞ必しも形迹,憑証あるの事のみを待ちて史料とせんや。

また,「歴史の話」では,愛山は「考証」を二つに分け,「単に此事が有つたとか,無かつたとか云ふ個々別々のことを穿索する」「下等考証」と,「之れよりも穿索の趣意を広くして国民の生活は如何。人情風俗の変遷は如何などゝ云ふ大なる問題につひて穿索」する「高等の考証」があるとしている。そして,後者の考証を目的とするのであれば,稗史小説戯曲や紀行文,詩歌なども歴史の材料になるのであり,それらによって「日本国民の生活,感情,政治,社交等の有様」の具体的な様相をうかがうことができる,と愛山は述べている。

第一節で見たように,歴史の材料としての文学の有用性に関する認識は文明史・文明論とそれを前提とした歴史／文学という枠組みに由来するものであった。ただ,「戯曲,小説(史料として)」の先の引用部にあるように,文学に表れている「風俗,人情,信仰,気象」や「風説,作話,流行せる想像」を「事実」として意味づけ,それに基づいて国民の生活や人情風俗の変遷といった「大なる問題」を「穿索」することを「考証」と呼ぶ

のは、おそらく同時代にはあまり見られない愛山独自の用語法であっただろう。それは同時代の歴史学の言説との関係性の中で選択されているものであった。

では、愛山の議論と交錯する同時代の歴史学の言説とはいかなるものであったのだろうか。ここでは「文学と歴史」で名前が挙がっていた重野安繹の議論を中心にして見ていきたい。

重野は明治前半期の政府の国史編纂事業を主導した人物であるが、まず、重野の議論を検討する上で前提となる、国史編纂事業の概要を確認しておく。

明治政府の国史編纂事業は、明治二年の明治天皇による「修史御沙汰書」に端を発し、担当部局のいくつかの変更を経て、明治八年には太政官正院修史局において行われることとなった。重野が国史編纂事業に関わり始めるのはこの修史局からで、彼はそこで副長を務めた。明治一〇年には修史局は修史館と改称され、明治一五年から『大日本編年史』の編纂がスタートした。『大日本編年史』は編年体を基本とする歴史書で、漢文で記され、その記述の範囲は南北朝時代から明治維新までとされた。明治一八年からは、全国に修史館の館員を出張させ、大規模な一次史料の調査を行っている。修史館は、明治一九年に内閣臨時修史局と改称され、明治二一年には、『大日本編年史』の編纂事業が帝国大学に移管されるのに伴って、臨時編年史編纂掛と改称された。この帝国大学の編纂掛のメンバーが中心となって、歴史学の拠点となる史学会が設立され、重野はその初代会長に就任している。さらに、明治二四年には臨時編年史編纂掛は史誌編纂掛と改称されるが、明治二六年に『大日本編年史』の編纂は中止され、史誌編纂掛も廃止されることとなる⁽⁶⁾。

こうした『大日本編年史』の編纂事業は「古文書を中心とした一次史料に基づく歴史の記述という、日本の実証的歴史研究の出発点」⁽⁷⁾であ

った。そして、重野はその編纂事業で明らかになった事柄を折に触れて講演や論文で発表していったわけだが、その中で彼が主張していたのは、歴史学の目的は一次史料を典拠として正確な事実を解明することであり、これまでの歴史書には誤りが多々あるということであった。

例えば、「世上流布ノ史伝多ク事実ヲ誤ルノ説」では、「歴史ハ引用書ヲ扱フヲ第一ノ要目トス」とし、頼山陽の『日本外史』は「引用セシ書類、確實ヲ得スシテ、大ニ謬誤ノ説ヲ伝ヘタリ」と述べ、山陽が依拠した史料を具体的にあげながら、その誤りを指摘している。そして、修史館は、より確実な記録や史料に基づいて正しい事実がどのようなものであったかを明らかにした上で、「世上流布ノ謬伝妄説ヲ一洗」することを目的としていると述べている。

また、「史ノ話第三回」では、『大日本史』の南北朝期の記述に誤りが多いと述べ、その原因としてそこでの記述の多くに『太平記』を引用していることをあげている。重野は『太平記』について次のように述べている。

太平記ハ其当時ニ書シモノニテ、且ツ南朝ニ肩ヲ持チ、新田楠木諸氏ヲ最眞シタレハ、其説信拠スヘシトテ、日本史他書ヲ閣キテ之ヲ採用セリ、是其誤謬ヲ致ス所以ナリ、凡ソ紀事ノ書ニ両様アリ、実録（日記家記ノ類）ト物語（戦記軍談モコモル）トナリ、実録類ハ唯有ノ儘ニ書キ、物語類ハ人ノ見テ面白カル様ニ書ク、太平記ハ物語ノ類ニテ、虚実相雜レリ、同時ニ梅松論増鏡等ノ書アリ、間々取捨スヘキ所アレトモ実録ナリ、然ルニ梅松論ハ足利氏臣子ノ手ニ成タリトテ採用セス、増鏡モ北朝公卿ノ作ナル故ニ棄ラレ、専ラ太平記ニ拠タルハ、日本史ノ偏見ナリ

史料には実録と物語があり、歴史で参照すべきなのは「唯有ノ儘」を記録している前者で、「虚実」が混在している後者については参考程度にと

どめるべきである。ところが、『大日本史』の南北朝期の記述は、専ら南朝勳員の物語である『太平記』に依拠しており、『梅松論』や『増鏡』といった実録は北朝方の記録であるという理由から採用していない。そのため、誤りが多いのである。そうした引用史料の偏りは『大日本史』編者の「偏見」によるものであり、歴史家は第一にそうした偏見を捨て去らなければならない。重野は上記の引用部でそのように主張していたのである。そして、この後で、もう一度『大日本史』の史料の選択を批判し、「引書ノ如キハ、其実ヲ得ルト否トヲ問ヘシ、何方ノ作何人ノ筆ナリトモ、差別ヲ立ヘカラス」と述べている。

こうした原則を確認した上で、重野は『太平記』に由来する「笠置皇居南木ノ御夢」や「桜井駅子別ノ事」といった人口に膾炙したエピソードが「拵事」であることを、実録等の記述に依りながら明らかにしている。

さらに、明治二〇年に史学会で行った講演をもとにして書かれた「児島高德考」で、重野は、『太平記』の本文を引きながら、児島高德が登場する部分の記述に矛盾や不自然な点が多いことを指摘し、忠臣の典型とされてきた児島高德は『太平記』の作者である小島法師が拵えた人物であると主張している。こうした『太平記』の登場人物やエピソードの虚構性を暴いていく重野の議論は、当時「抹殺論」と称され、国民的な英雄や社会的に共有されている過去の伝説を否定するものとして、様々な批判が寄せられることとなった。

重野は、そうした批判を踏まえながら、歴史学とはどのような学問で、歴史家にはいかなる資質が必要なのかを繰り返し説明しようとしていた。例えば、「史学ニ従事スル者ハ其心至公至平ナラザルベカラズ」では、重野は「歴史家ハ尤モ心ヲ公平ニシテ、偏見私意ヲ介セサルヲ務ムヘシ」とした上で、次のように述べている。

歴史ハ時世ノ有様ヲ写シ出スモノニシテ、其有様ニ就キ、考案ヲ加ヘ、事

理ヲ証明スルコソ,史学ノ要旨ナラン,然ルニ歴史ハ名教ヲ主トスト云フ説アリテ,筆ヲ執ル者,動モスレハ其方ニ引付ケテ,事実ヲ枉クル事アリ,世教ヲ重ンスル点ヨリ云ヘハ,殊勝トモ称スヘキナレトモ,ソレカヲメ実事実理ヲ枉クルニ至ルハ,世ノ有様ヲ写ス歴史ノ本義ニ背ケリ,唯實際ヲ伝ヘテ,自然世ノ勸懲トモナリ,名教ノ資トナル,是即所謂公平ノ見,公平ノ筆ナリ

そして,重野は「学問は遂に考証に帰す」において,「色々なものをは取合せて,証拠を執つて定める」ことを「考証」と定義し,史学はもちろんのこと,世の中の全ての学問は考証をその方法の基礎に据えなければならないと主張する。重野によれば,学問はどここの国でも初めは「空理空論」であったが,「追々に実証を取る方法となり,支那は二百年前,日本は百年前,西洋は五十年前,少しの遅速はあれども,終に一轍」になり,それが「学問の開け」となったという。それゆえ,学問という点から言えば,「道理」を先に立ててそこからあらゆる事柄を導き出そうとする方法は「臆想」になることが多いので退けられる。道理を定めるにもまず「証拠」が必要とされるようになったのであり,まして「事蹟」などを「無証拠」に定めようとするのは「実に無理な話」とされるようになったのである。

歴史学は,史料の比較・検討を通して正確な事実を確定していくことで「時世ノ有様ヲ写シ出ス」ことを目的とするものであり,そこでの事実を確定する手続きはあらゆる学問に共通して必要とされる考証という方法に則ったものである。また,事実の確定という点においては,虚実の混在している『太平記』のような物語ではなく,出来事をありのままに記している一次史料に基づくべきである。重野の主張はそのようなものであるわけだが,愛山が問題としていたのは,そうした形で定義される歴史では重要な領域が対象化し得ないということであった。すなわち,重野が主張

している方法では、事実は「一定の時間に起りたる一定の事件」に限定されてしまい、そうしたカテゴリーではすくい上げることのできない人情や風俗といった要素が歴史記述の対象から抜け落ちてしまう。さらに、重野の言う考証は、結局、「此事が有つたとか、無かつたとか云ふ個々別々のことを穿索する」だけの方法であり、それでは国民の生活や感情といった、長期的なスパンを想定しなければその存在が浮かび上がってこない事象を歴史記述の対象とすることができなくなってしまう。愛山はそのような形で文明史・文明論の視点に拠りながら重野が主張する歴史学の方法論を批判していたのである。

重野の議論が、『大日本編年史』のような、中国の正史をモデルとした漢文の歴史書を前提としているのに対して、愛山の議論は文明史・文明論を基盤とした歴史記述を想定しており、両者がイメージしている歴史書のあり方はまるで異なるものであった。事実や考証に関する捉え方の差異も、当然それに由来するものであるわけだが、愛山はあえてその差異を浮き彫りにすることで、歴史学の方法論を問題化し、文明史・文明論に基づいた歴史記述の有用性を主張していたのである。

第三節 文学との関連

先節では、山路愛山の歴史と文学に関する認識と同時代の歴史学の言説との関係を見たわけだが、では、愛山の認識と同時代の文学に関する議論はどのような形で関連していたのであろうか。本節ではその点を、同時代の文学への批判と過去の文学の捉え返しという二つの側面から検討していく。

第一の、愛山的な認識が同時代の文学に対する批判へとつながった典型的な事例は、竹越与三郎の「文学界の欠点」に見ることができる。竹越はそこで、現在の文学の問題点として「人民てふ分子」が欠けていることをあげている。彼によれば、文学者は「一世の潮流」を書かなければなら

ないが、その中でも最初に踏み込まなければならないのは『人民』てふ大運動であるという。それは「一百年来欧米を蹂躪して、戦勝の余威を以て我国に入り来りしもの」であり、日本においても「最も広く、最も強よく、最も深く行はれたる大運動」である。しかし、日本の文学者はそうした問題に全く注意を払っていない。例えば、「車夫と紳士との争」があったとしよう。文学者はそれを軽く扱って「雲助と士の喧嘩」と同様のものとするが、こうした出来事こそ「自由平等の大観念は、知らず識らざるの間に、如何なる広被を人心の上に為せしかを穿鑿する」上では「歴史上の一大事実」なのである。

さらに、竹越は、現在の文学者が「現今の世態」に満足していて、「改革の念慮」を有していないことも批判する。現在の文学者の多くは「貧富の関係が如何に成り行く」か、「人民と貴族との関係が如何に変わる」か、あるいは、「民権の宿る農夫、商人、工業家が如何に逆待苦役せらるゝ」かといった問題には全く注意を払っていない。彼等は現在か過去にばかり目を向けていて、将来、社会がいかに変化していくか、あるいは、いかに変化していくべきかという点には一向に視線を向けようとしないのである。「新国民を導きて雄心勃鬱たらしめん」には、「詩人の職分」が最も重いはずなのに、彼等に「人民改革の念」が少ないのは「遺憾千万」である、と竹越は述べている。

そして、こうした問題を克服するためにも文学が「社会の実状」に触れることが重要だと竹越は主張する。世間には悟り顔で「社会の変、政治の推移の如きは、文学者の関係すべきにあらず」と言う人もいる。しかし、それは「文学の真意」を理解していない人間の言葉である。「一人一戸の変遷を咏懐する」ことを「詩文の本色」とするならば、「廣大なる国民の推移を咏懐する」こともまたその本色なのである。それゆえ、文学を「社会の実状に触れざる空文学」にしないためにも、「人民てふ観念」が必要である。竹越はそのように結論づけていた。

第一節で見たように、山路愛山は歴史の材料として文学を使うことを提唱していた。それは、人民の風俗人情や社会の裏面といった、文学で描かれることで初めてその存在が理解できる領域が存在しているという認識によるものであった。右の竹越の議論は、そうした領域を文学で描くべきものとした上で、現在の社会でそれに相当するのは、自由平等の観念の拡がり、あるいは、貧富や民権の問題の行く末といった、人民という分子と関わる事象であり、現在の文学にはそれが全く描かれていないことを批判しているものであった。愛山の認識に引きつけて言うならば、竹越が問題化していたのは、現在の文学には歴史の材料となり得る事柄が描かれていないということだったのである。

第二の、愛山的な認識が過去の文学の捉え返しにつながっていった事例は、近松門左衛門の作品の読み直しに見ることができる。

『早稲田文学』の「近松浄瑠璃の分析」⁽⁸⁾は、「近松の作を賞鑑することは今にはじまりたることにあらねど其彼を美とする所以は此一二年間に於て大に変化せり」と述べる。以前は「其章句の靈妙なると脚色の巧緻なるとを眼目」として、「近松が三傑作は総て時代物」から選ばれていた。「婉曲の中に自然の雅趣ある人情活動の心中物」は「第二位」に置かれていたのである。それが近年では世話物を称揚する者が増えてきているとし、当該記事はその事例をあげている。こうした変化の背景にはいくつかの要因があるが、その一つが近松の世話物には同時代の社会が写し出されているとする認識であった。

それを最も分かりやすく示しているのが、愛山自身の議論であるだろう。愛山は近松に何度か言及しているが、例えば、「心中天の網島」を読む¹⁾では、「小説は或る意味に於て歴史也、否歴史よりも更に真実なる事実を教ふる者也。(中略) 況んや「世話狂言」として劇場に演せられ、公衆の喝采を博したる戯曲の如きは実に国民の写真と曰はざるべからず」

とし、近松の「心中天の網島」を読むとそのことがよく分かると主張している。その上で、愛山は近松を「写実家」とし、彼がその戯曲で写し出していたのは「実際の社会」とそこで生きる「血肉を具するの人物」であり、近松の作品を読むと「元禄の時代に生れて、自ら其社会を觀察せしが如き心地す」と述べている。

そして、民友社の十二文豪シリーズの一冊として刊行された塚越芳太郎の『近松門左衛門』では、右のような愛山の認識の延長線上で、近松の世話物が「社会（的）戯曲」という概念で捉え返されている。

塚越は、時代物／世話物という従来用いられてきた区分を史的戯曲／社会戯曲という区分に置き換えた上で、近松の史的戯曲は「理想的」であるのに対して、社会戯曲は「写實的」であり、前者には佳作がほとんどないのに対して、後者には佳作が多いとする。塚越によれば、史的戯曲は「国民の妄誕卑俗なる意想を写実」したものであるため、その戯曲にも妄誕卑俗な要素が混在してしまっている。また、時代や人物や場所も観客に合わせて「通俗に翻訳」されており、描かれている事実も誇張されたものとなっている。それに対して、社会戯曲は「材を現社会に取りて直に造化の足跡を活写」したものであり、元禄時代の「平民社会」が実によく描かれているとして、次のように述べている。

彼は社会の光明なる半面をも画きしなり。黑暗なる半面をも画きしなり。其眼に映するが儘に社会を其在るが如くに画きしなり。故に又其時代や、其風俗や、其習慣や、其文物や、其好尚や、其生活や、其宗教や、其思想や、其人類や、其社会や、躍々として見るべく、歴々として指すべし。以て社会史たるべく、以て国民の思想史たるべく、以て元禄日本の活歴史たるべきのみならず、亦以て人類歴史の一部たるべし。⁽⁹⁾

時代物／世話物から史的戯曲／社会戯曲という区分の変換には、「戯曲

を文学の最高位に置き、その実現をめざそう」⁽¹⁰⁾としたドラマ論の影響を見ることができるわけだが、塚越は社会戯曲そのものの読み取りにもドラマ論を活用していた。すなわち、近松は社会戯曲で「人心内に於ける企図と道德との衝突に由れる意見の交闘を描き、以て人間各自の性情に基ける其外界との衝突に関する命運」を描いていたのであり、そうした構図の中で登場人物の「墮落」や「過失」「死」を描いていくことで、「主人圧政の不可」「家庭舅姑の圧制」の「非」といった当時の社会の歪みをそのまま写し出していたのだ、と塚越は述べている。右の企図と道德の葛藤や性情と外界との衝突といった構図はドラマ論で重要視されていたものに他ならず、塚越は、文学と歴史を関連づける愛山的な認識とドラマ論を交錯させることで近松の作品を新たな形で読み解こうとしていたのである。

ところで、山路愛山は「近松の戯曲に現はれたる元禄時代」において、再び近松の作品を論じている。その読解は、近松の作品を元禄時代の社会を写し出したものとして評価するという、先に見たものとほとんど変わりが無い。ただ、その「緒論」での議論は、愛山の事実に関する認識が本論で見てきたものとは異なる文脈に置かれていることを示している。

愛山はそこで近松と西鶴を比較した『早稲田文学』のある記事を取りあげる。その記事では、西鶴は「目前の実況」を写して「実」を表しただけであるのに対して、近松は「千古に亘りて不朽なるべき人情」を写して「真」を表したのであり、それゆえ、西鶴の作品の影響は一時的なものであり、近松の「不朽なる人心の宝庫」とも言うべき作品とは比較にならない、と記されている。これに対して、愛山は「真と実とを強く分たんとする牽強附会の議論」であると批判して、次のように述べている。

シェークスピアが異教的文学復興のエリサベス時代を代表したるは論なし、近松の最も見るべき所も亦善く元禄時代の生活を表示した

るに在り。永遠は時間の中に表はれ、精神は衣粧に表はれ、無限は有限に表はる。真と実とは分るべからざる原因と結果なり。カライルの極論したるが如く、精神は形体の源因なり。写して実なれば写して真なり。真を写さんとせば実に顕はれたる者を写さざるを得ず。たとひ西鶴は其衣粧を写し、近松は其感情を写したるの區別あるにもせよ、衣粧も感情も吾人の筆に上る時は是れ既に一個の形象なり。此形象を写して実なれば是れ真なり。近松にして若し能く人間を写さんとせば必らず自家の心に映じたる形象を取つて之を筆に上さざるを得ず。彼れたとひ何程の大才と雖も、時間を離れて永遠を写す能はず、衣粧を離れて精神を写す能はざるなり。

愛山が言及している『早稲田文学』の記事は、おそらく島村抱月の「西鶴の理想」であるだろう。そして、抱月は上記の様な愛山の批判に対して、「真と実と」で反論を行っている。そうした愛山の主張と同時代的な議論の関係については稿を改めて論じることとしたいが、ここでは事実と真実との関係が問題になっており、両者を異なるものとして分割する議論に対して、愛山は、真を含んだものとしての実という、事実一元論のような立場から反論を加えている。それは歴史との関係において事実を思考していた時とは異なる文脈において、文学における事実が問題化していたことを示しているのである。

[註]

- (1) 愛山は論文名を記していないので論者が補った。
- (2) 吉岡 [2004]。
- (3) 福澤 [1875: 卷之五, 十二~十三]。引用は国立国会図書館デジタルライブラリー所蔵本 (書誌 ID 000001004734) による。
- (4) こうした文明史・文明論の歴史記述の方法については、吉岡 [2008] において、田口卯吉の『日本開化小史』と「日本之意匠及情交 一名社会改良論」を取りあげて詳しく論じている。

- (5) 吉岡 [2001]。また、亀井 [1999] では、近世期における正史実録／小説稗史という枠組みについて詳しく論じられている。
- (6) 国史編纂事業については松沢 [2012] ,マーガレット [2017] を参照。
- (7) 松沢 [2012 : 45]
- (8) 『早稲田文学』「時文評論」明治二五年八月,第二二号。
- (9) 塚越 [1894 : 214]
- (10) 十川 [1987 : 113]。ドラマ論については吉岡 [2015] も参照。

[参考文献]

- 亀井秀雄, 1999, 「第二章 歴史との拮抗」, 『小説論 『小説神髓』と近代』, 岩波書店
- 北村透谷, 1892, 「徳川氏時代の平民的理想」, 『女学雑誌』第 322 号～324 号
- 重野安繹, 1884, 「世上流布ノ史伝多ク事実ヲ誤ルノ説(十七年二月十五日)」, 『東京学士会院雑誌』第六編之五
- 1886, 「史ノ話第三回(十九年十二月十二日)」, 『東京学士会院雑誌』第九編之三
- 1889, 「史学ニ従事スル者ハ其心至公至平ナラザルベカラズ(明治廿二年十一月一日第一会演述)」, 『史学会雑誌』第 1 号
- 1890, 「児島高德考」, 『日本大家論集』第二卷第六号
- 「学問は遂に考証に帰す(廿三年三月九日講演)」, 『東京学士会院雑誌』第十二編之五
- 島村抱月, 1895, 「西鶴の理想」『早稲田文学』第 79～81 号
- 1896, 「真と実と」『早稲田文学』(第一次第二期)第 2 号
- 竹越与三郎, 1891, 「文学界の欠点」, 『国民新聞』8 月 6 日
- 塚越芳太郎, 1894, 『拾式文豪 近松門左衛門』, 民友社
- 坪内逍遙, 1885, 「小説神髓拾遺 時代物語の論」, 『中央学術雑誌』第 6 号
- 十川信介, 1987, 「「ドラマ」のゆくえ——近代小説創始期の理想像——」, 『「ドラマ」・「他界」——明治二〇年代の文学状況』, 筑摩書房
- 福澤諭吉, 1875, 『文明論之概略』
- マーガレット・メール, 2017, 『歴史と国家 19 世紀日本のナショナルアイデンティティと学問』, 東京大学出版会
- 松沢裕作, 2012, 『重野安繹と久米邦武 「正史」を夢みた歴史家』, 山川出版社
- 山路愛山, 1892, 「文学と歴史(廿五年八月二七日麻布青年会に於て)」, 『護

教』第 62 号

「平民的短歌の発達」, 『国民之友』第 167 号～169 号

「山東京山」, 『国民新聞』10 月 30 日。

1893, 「「心中天の網島」を読む」, 『国民新聞』5 月 25 日。

1894, 「論史漫筆」「戯曲, 小説(史料として)」, 『国民新聞』1 月 30 日

「歴史の話」『国民新聞』4 月 29 日, 5 月 1 日。

1895, 「近松の戯曲に現はれたる元禄時代」, 『国民之友』第 271 号～285 号

吉岡亮, 2017, 「徳富蘇峰『人物管見』論——人物評論と同時代の文学論」, 『研究成果報告 歴史叙述と文学』人間文化研究機構国文学研究資料館

2015, 「内田魯庵『文学一斑』におけるヘーゲル——その典拠とドラマ論——」, 『札幌大谷大学 社会学部論集』第 3 号

2008, 「現実を投影／構成する演劇——明治一〇年代の演劇と文明論, 社会改良論, 自由民権論の交錯」, 『日本研究』第 37 集, 国際日本文化研究センター

2004, 「儒教主義・文明史・愛国——明治十年代における教育の中の〈歴史〉——」『国語国文研究』第 127 号, 北海道大学国語国文学会

2001, 「歴史を語る芝居——明治初年～十年代における〈演劇〉と〈歴史〉——」『日本近代文学』第 65 集, 日本近代文学会

*附記 引用に際しては,原則として旧字は新字に改め,ルビ・記号等は適宜省略した。

*本稿は国文学研究資料館平成 25 年度共同研究「歴史叙述と文学」,及び,札幌大谷大学平成 29 年度特別加算研究費(研究課題名「明治期における人物表象の研究——民友社を中心として——」)の研究成果の一部である。

(よしおかりょう, 札幌大谷大学社会学部准教授)